

論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	① 乙	第 号	論文提出者名	原田 亮
論文審査 委員氏名	主査 田中 貴信 副査 服部 正巳 三谷 章雄			
論文題名	概形印象における印象欠陥の実態の観察 および評価シートの試作とその有用性の検討			

インターネットの利用による公表用

(論文審査の要旨)

No. 1

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

概形印象採得は、研究用模型を製作する上で不可欠とされ、歯科診療における最も基本的な術式であるが、現在の歯科医学教育では、概形印象採得における指導指針は不明瞭である。そこで申請者は、概形印象採得における具体的な指導指針が必要であると考え、その対策を検討したものである。本研究では実験1として、歯学部学生と研修歯科医が採得した概形印象から印象欠陥の抽出を行い、実験2として、実験1の結果を基に概形印象採得における指導指針となる評価シートを試作し、その有用性を検討している。

実験1における被験者および対象群は、愛知学院大学歯学部4年生：122名を4年生群、5年生：60名を5年生群、そして本学歯学部附属病院に所属する研修歯科医：88名を研修歯科医群としている。被験者は相互にて上下顎の概形印象を、アルジネート印象材を用いて採得させた。撮影された概形印象は、ただちに写真撮影を行い画像データとして記録した後、同一の評価者がディスプレイ上にて印象欠陥を探索し、印象欠陥が存在しない場合を合格、印象欠陥が存在し、再度印象採得が必要となる場合を不合格と判定している。本研究では、概形印象の歯列部のみを観察対象とし、上下顎ともに①前歯部、②左側臼歯部、③右側臼歯部に区分けている。

実験1では、各群における合格率、印象欠陥の様態、および印象欠陥の部位別出現率を検討している。各群における合格率は、4年生群では上顎：11.5%、下顎：25.0%、5年生群では上顎：66.7%、下顎：70.0%、研修歯

科医群では上顎：85.2%、下顎：88.6%であった。4年生群は、上下顎ともに合格率は最も低く、経験年数が増加するにつれ合格率は増加したことを確認している。

確認された印象欠陥の様態は、①「部分的な印象範囲の不足」、②「印象材のトレーからの剥離・ちぎれ」、③「トレー圧接の遅れ・圧接不足」、④「トレー選択の誤り・調整不足」、⑤「トレー圧接位置の誤り」の5項目であり、各群の上下顎とも「部分的な印象範囲の不足」が最も多かった。

また、最も多くみられた「部分的な印象範囲の不足」において、不合格と判定された印象の総数を100%とした際の印象欠陥の部位別出現率は、4年生群の上顎では①前歯部：87.4%、②左側臼歯部：35.6%、③右側臼歯部：37.9%、下顎では①：70.0%、②：45.0%、③：41.3%であった。5年生群の上顎では①：100.0%、②：5.9%、③：5.9%、下顎では①：72.7%、②：18.1%、③：18.1%であった。研修歯科医群の上顎では①：80.0%、②：30.0%、③：30.0%、下顎では①：25.0%、②：62.5%、③：37.5%であった。印象欠陥の部位別出現率は、研修歯科医群の下顎を除いて、前歯部に最も多くみられた。

実験2では、実験1の結果に基づき概形印象採得における評価シートを試作し、それを使用して指導をした後、再度概形印象を採得させ、同様に印象欠陥を比較することで評価シートの有用性を検討したものである。

評価シートは、評価項目と指導項目に分類され、評価項目では重度評価項

目、中等度評価項目、その他評価項目となっている。重度評価項目は、「印象材のトレーからの剥離・ちぎれ」、「トレー圧接の遅れ・圧接不足」等、明らかに再印象採得が必要となるものとしている。中等度評価項目は、「部分的な印象範囲の不足」、「不明瞭な印象面」等、印象欠陥が部分的に存在し、場合により再印象採得が必要となるものとしている。その他の評価項目は、「印象材の咽頭方向への流出」、「トレーと組織の干渉」とし、患者に苦痛を与え得るものとしている。

被験者および対象群は、歯学部5年生の中で、実験1にて不合格と判定された者を対象とし、評価シートに従って指導を受けた者をシート群（上顎：9名、下顎：10名）、従来通り口頭指導のみを受けた者を口頭群（上顎：8名、下顎：7名）としている。

シート群では、まず実験1と同一の評価者が、実験1にて採得した概形印象をディスプレイ上で確認し、評価シートに基づいて評価し、被験者に対して概形印象の画像と評価シートを使用して説明と指導を行っている。その後、被験者には再度概形印象を採得させた。

口頭群では、印象欠陥を確認後、被験者に画像を見せながら、従来通り口頭のみでの説明と指導を行っている。その後、被験者には再度概形印象を採得させた。

シート群の合格率は、上顎：88.9%、下顎：100%で、口頭群は上顎：17.5%、下顎：52.1%であった。シート群は、口頭群よりも上下顎ともに合格率が

(論文審査の要旨)

No.4.....

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

高くなり、試作した評価シートの有用性が明確に確認されたとしている。
本研究において申請者は、歯学部学生および研修歯科医を対象とし、概形
印象採得における現状を把握し、それらを基に評価シートを試作しその有
用性を検討した。その結果、評価シートの有用性が確認され、教育効果が
高いことが示唆されたため、本研究は歯科補綴学のみならず、関連諸学科
に寄与するところが大きいと思われる。よって本論文は博士（歯学）の学
位授与に値するものと判定した。

平成27年 1月28日